

総目次

2017年(第1号～第7号)

[表示は、題名、著者名、(号)掲載ページ]

特集

第1号

DNPの理念と実際

専門看護師をさらに育てる博士課程教育
(企画：萱間真美)

米国におけるDNPの現状と展望. 余善愛. (1) 12-17.

[イリノイ大学シカゴ校におけるDNP養成の実際] Nurse practitioner transformation to the Doctorate of nursing practice : Crossing the boundaries and navigating the process. K.J.H. Sparbel, S.J. Corbridge, & L. Scott. (1) 18-24.

[イリノイ大学シカゴ校におけるDNP養成の実際] (翻訳) ナースプラクティショナーからDNPへ——境界を越えてプロセスを切り拓く. (1) 25-31.

[イリノイ大学シカゴ校におけるDNP養成の実際] DNPコースの学生の立場から考える. 石田佳奈子. (1) 32-38.

米国におけるDNP養成の概要——米国の白書などからみえること. 新福洋子, 大橋明子, 奥裕美, 大久保暢子, 長松康子. (1) 39-45.

日本におけるDNP養成に向けて——教育方法とカリキュラム開発. 吉田千文, 亀井智子, 片岡弥恵子, 小林京子, 三浦友理子. (1) 46-53.

日本における専門看護師の現状とこれからの課題. 宇都宮明美. (1) 54-58.

わが国におけるDNP教育に求められるもの. 萱間真美. (1) 59-64.

第2号

若手研究者育成のさらなる進展 海外大学の視察を中心に

(企画：真田弘美)

東京大学医学部附属Global Nursing Research Center構想——イノベティブ看護学研究の推進に向けて. 真田弘美, 上別府圭子, 山本則子, 大江真琴, 高橋真実. (2) 102-106.

[視察報告——若手研究者育成の視点] NIHによる若手研究者育成支援——NINRを中心に. 真田弘美, 仲上豪二郎, 山本則子, 野口麻衣子, 副島堯史. (2) 107-113.

[視察報告——若手研究者育成の視点] University of Pennsylvania. 山本則子, 仲上豪二郎, 真田弘美, 野口麻衣子, 副島堯史. (2) 114-119.

[視察報告——若手研究者育成の視点] Johns Hopkins University. 副島堯史, 山本則子, 真田弘美, 仲上豪二郎, 野口麻衣子. (2) 120-126.

[視察報告——若手研究者育成の視点] University of California, San Francisco. 野口麻衣子, 山本則子, 真田弘美, 仲上豪二郎, 副島堯史. (2) 127-132.

[視察報告——看護連携の視点] NINRにおける所内研究. 仲上豪二郎, 真田弘美, 山本則子, 野口麻衣子, 副島堯史. (2) 133-138.

[視察報告——看護連携の視点] University of Missouri, Columbia. 森武俊, 吉田美香子. (2) 139-146.

[視察報告——看護連携の視点] The University of British Columbia. 吉田美香子, 森武俊. (2) 147-152.

日本の看護学研究と東京大学医学部附属Global Nursing Research Centerがめざすもの. 山本則子. (2) 153-155.

第3号

質的統合法の現在

グラウンデッド・セオリーとの
比較を中心に考える

(企画：正木治恵)

[質的統合法(KJ法)とグラウンデッド・セオリー] (座談会) 質的統合法(KJ法)とグラウンデッド・セオリー. 正木治恵, 野村俊夫, 小島通代, 山浦晴男. (3) 202-211.

[質的統合法(KJ法)とグラウンデッド・セオリー] クラシック・グラウンデッド・セオリーの考え方と方法. 小島通代. (3) 212-217.

[質的統合法(KJ法)とグラウンデッド・セオリー] クラシックGTとKJ法およびそれに準拠した質的統合法(KJ法)の比較. 山浦晴男. (3) 218-227.

[質的統合法(KJ法)とグラウンデッド・セオリー] 看護研究に質的統合法(KJ法)を用いる意義——GTとの比較から. 正木治恵. (3) 228-233.

[質的統合法(KJ法)の看護研究論文への活用] 質的統合法(KJ法)の看護研究への活用の発展性. 小林裕美. (3) 234-240.

[質的統合法(KJ法)の看護研究論文への活用] 質的統合法(KJ法)の博士論文への活用の実際とその有用性. 高橋良幸. (3) 241-246.

〈コラム〉質的統合法(KJ法)と精神療法の接点と可能性. 丸山晋. (3) 247.

[英国におけるKJ法と質的研究の展開] 英国におけるKJ法の展開. 野村俊夫. (3) 248-253.

[英国におけるKJ法と質的研究の展開] Qualitative research

approaches used in UK nursing studies: An overview with examples. Deidre Wild, Becky Whiteman, Deborah Biggerstaff, Kate McCarthy, Ala Szczepura. (3) 254–262.

第4号(増刊号)

特集1 看護学の知を どう構築するか

(企画:『看護研究』編集室)

看護学の「知」の構築と看護学研究のこれからに思う. 井上智子. (4) 295–299.

「看護学の知」とは何か——研究と業務改善の比較から考える. グレグ美鈴. (4) 300–304.

看護学の知は何をもたらすか. 坂下玲子. (4) 305–309.

身体が考える「動く知」. 西村ユミ. (4) 310–314.

看護師の「考える力」が、看護の知をつくる. 山田雅子. (4) 315–319.

看護学の知の創出のために求められる論文とは、研究者のあり方とは. 山本則子. (4) 320–324.

[多領域の視点から]経験の流れを内側から捉える知——現象学と他の方法はいかにして補い合うのか. 村上靖彦. (4) 325–329.

人びとの実践における「行為の理解可能性の公的な基準」の探求. 秋谷直矩. (4) 330–334.

「ドーナツの穴」から考える学問の現在. 中村征樹. (4) 335–339.

特集2 若手研究者が描く未来

看護学研究者の「若手」コミュニティの形成と活動. 綿貫成明. (4) 342–346.

研究者としての軌跡と、看護の発展に向けた課題. 岩國亜紀子. (4) 347–351.

“遠回り”によってたどりついた研究者としての立ち位置. 大澤絵里. (4) 352–355.

人々のあたりまえの生活と健康を守るために研究者ができること. 鳥本靖子. (4) 356–360.

「高齢者とその家族の在宅生活の安寧をいかに支援できるか」という問いを追い求めて. 丸尾智実. (4) 361–364.

第5号

事例研究をどうみだすか

事例がもたらす知の可能性

(企画:『看護研究』編集室, 企画協力:山本則子)

[看護領域から]看護学における事例研究法の意義と可能性. 黒江ゆり子. (5) 406–417.

[看護領域から]事例研究とリフレクションの関係——省察的

研究者としての実践者. 東めぐみ. (5) 418–427.

[看護領域から]〈対談〉看護実践において事例がもつ意味とは——「看護現場学」の取り組みから. 陣田泰子, 山本則子. (5) 428–438.

[看護領域から]看護実践に資する知はどのような事例研究で生成できるか. 事例研究の知はどのように活用できるか. 山本則子, 吉田滋子, 山花令子, 齋藤凡, 柄澤清美, 榊原哲也. (5) 439–446.

[関連領域から]事例研究の可能性を探る. 水野節夫. (5) 447–454.

[関連領域から]臨床心理学における事例研究の位置づけと課題. 渡邊 誠. (5) 455–460.

[関連領域から]ナラティブ・ベイスト・メディスンと事例研究. 斎藤清二. (5) 461–467.

[関連領域から]医学におけるケースレポート——その意義と方法. 水野 篤. (5) 468–475.

第6号

看護を変革する 看護実践研究の可能性

英国の Work-based learning (WBL) /
Work-based research (WBR) を含めて
(企画:黒江ゆり子)

看護実践研究の意義と方法. 黒江ゆり子. (6) 520–526.

看護実践研究をどう教えているか. 北山三津子. (6) 527–532.

[英国の WBL / WBR とは] Work-based learning and work-based research: A UK perspective. Tina Moore. (6) 533–539.

[英国の WBL / WBR とは] 〈翻訳〉英国における WBL / WBR の視点. (訳) 北原保世, 黒江ゆり子. (6) 540–546.

[英国の WBL / WBR とは] Work-based research in action: Nursing. Sheila Cunningham. (6) 547–554.

[英国の WBL / WBR とは] 〈翻訳〉実践活動と WBR ——看護学の場合. (訳) 北原保世, 黒江ゆり子. (6) 555–562.

[看護実践研究の具体的取り組み]退院後の療養生活の充実に向けた支援方法の開発. 藤澤まこと. (6) 563–571.

[看護実践研究の具体的取り組み]遷延性意識障害者とその家族への看護援助——2年間の入院期間における家族の“気がかり”にアプローチするケア. 高橋智子. (6) 572–579.

[看護実践研究の具体的取り組み]主体的な出産・育児に向けて地域助産師が行なう妊娠期の支援. 武田順子. (6) 580–584.

[看護実践研究の具体的取り組み]高齢者ケア施設における倫理に適った看護実践の構築と利用者・家族の反応. 岸上弥栄美, 梅津美香, 奥村美奈子. (6) 585–591.

[看護実践研究の具体的取り組み]出生前診断によって胎児の予後不良が予想された家族へのバースプランの開発. 馬場枝里香, 服部律子. (6) 592–598.

理論家Royと理論分析家 Fawcettの対話

看護学の未来へ

(企画:『看護研究』編集室, 企画協力:津波古澄子)

[インタビュー] Interview in Boston : Scholarly Dialogue —— 21世紀の激変する時代へのメッセージ, Sister Callista Roy, Jacqueline Fawcett, (インタビュー・訳) 津波古澄子, (7) 636–641.

[来日講演] 看護教育へのコミットメントと看護科学者になる選択, Sister Callista Roy, (7) 642–651.

[来日講演] 先史時代から現代までの看護学の変遷と不確かさ, 不穏, 激変の時代への対応, Jacqueline Fawcett, (7) 652–659.

Sister Callista Roy と Jacqueline Fawcett との質疑応答, (7) 660–664.

〈コラム〉理論家と理論分析家の対話に接して, レンデンマン美智子, (7) 665.

[座談会] 「看護学とは何か」を考え続ける——2つの講演が投げかけたこと, 津波古澄子, 筒井真優美, 中島恵美子, (7) 666–673.

原著論文

ソーシャルメディアで語られる安楽, 北谷幸寛, 八塚美樹, (5) 478–484.

健常高齢者における健康マージャン教室が認知機能や活動意欲に与える影響, 町島希美絵, 坂本麻衣子, 大島千佳, 北島かおり, 東内順子, 木場勉, 郷原るみ, 佐藤鮎美, 中山功一, (7) 678–691.

特別記事

「医療現象学」の新たな構築, 榊原哲也, (1) 68–72.

〈コラム〉「医療現象学の新たな構築」第1回研究会に参加して, 野口綾子, (1) 72.

文化人類学から医療人類学への道, そして質的研究への思い, 波平恵美子, (2) 158–164.

第2回日本混合研究法学会年次大会を振り返って, 野崎真奈美, 福田美和子, (2) 166–171.

研究報告

日本における「看護学生の感性」に関する概念分析, 小川宣子, 阪上由美, 七山(田中)知佳, 山本十三代, (3) 266–273.

総説

高齢者の皮膚疾患への対応——真菌症と湿疹・皮膚炎, 常深

祐一郎, 川島眞, (4) 370–379.

連載

創造360°・1

1 社会に生きる研究活動を展開する——エンターテインメント・エデュケーションの挑戦, 河村洋子, (1) 1–7.

2 言葉を超える, 身体という言葉——人間行動学者は何をみているのか, 細馬宏通, (2) 91–97.

3 なぜ病いを「書き」「語る」のか——闘病記がもたらす個人と社会の相互作用, 門林道子, (3) 191–197.

4 人工知能と看護の共生と共創——認知発達ロボティクス研究者の挑戦, 浅田 稔, (5) 391–401.

理論構築を学ぶ——看護現象から知を生むために

1 看護の知, 坂下玲子, (1) 74–81.

2 看護理論構築の歴史から考える, 小巻京子, 小野博史/坂下玲子, (2) 176–183.

3 理論を評価する①理論分析, 片岡千明/坂下玲子, (3) 276–283.

4 理論を評価する②クリティークと検証, 竹原歩/坂下玲子, (5) 500–507.

5 概念構築, 中野宏恵, 池原弘展/坂下玲子, (6) 614–621.

6 実践からの理論構築, 小野博史/坂下玲子, (7) 706–714.

専門看護師 CNS とは何か

CASE 1

夫の最期を迎える直前の妻だけの「1時間」, 宇都宮明美/井部俊子/大生定義.

CNSへのインタビュー——現象学的分析, 宇都宮明美/村上靖彦, (5) 487–498.

CASE 2

「触ってもらってよかったね」——CNSの触診がもつ効力, 梅田恵/井部俊子/大生定義

CNSへのインタビュー——現象学的分析, 梅田恵/村上靖彦, (6) 602–612.

CASE 3

「いつもと変わらず多弁・多動」と申し送られる患者への介入, 大橋明子/井部俊子/大生定義.

CNSへのインタビュー——現象学的分析, 大橋明子/村上靖彦, (7) 694–704.

書評

『質的研究Step by Step——すぐれた論文作成をめざして 第2版』質的研究論文作成の優れた指南書, 坂下玲子, (1) 67.

『からだのしくみ——ナースの視点』学生の学び直しとして大いに優れた参考書, 小池妙子, (2) 157.